福島県の沿岸海況ーⅢ. 統計解析および海沢予測について

石 井 勇

Oceanographic condition on the Coastal Sea of Fukushima Prefecture —III.

On the Statistical analysis and Prediction of the Oceanographic condition

Isami I Shii

ま え が き

本県沿岸海域の変動特性については、著者が以前に述べたが、1)2)とれらの報告は比較的近年(1965年以降)の資料をもとにしての特性および、現象についての報告であった。

しかし、本県は海洋観測の歴史が古いために観測データは、かなりの量が蓄積され未使用の状態である。そこで、本県沿岸を含む常磐海域の特性や長期変動を解明するためには、これらのデータの統計処理が必要とされる。ここでは、1940年1月から1975年3月までのデータについて統計処理を行い、その結果をもとに海況の予測を試みたので、その一部について報告する。

方

本県が実施した1940年1月から1975年8月までの観測データを使用した。1962年以前は現在実施されている沿岸定線が設定されていなかったので、ここでは、当時の観測データを現在の定線に適応させるために変換表(表1)を使用して、それぞれの定点について、層ごとに次のことを行った。

月平均値, 標準偏差値について。水温および塩分について, 定点別に 0,10,20,50,100,200 m 層の月平均値およ び標準偏差値を計算し, 海況の季節変動をみる。

定点間における相関について。上記の各層における,年間

表 1. 統計計算用変換メッシュー

K	a		
定		本 同	特ノ尾崎
定雄原	36°-59.5' N	37°-22.0'N	37 0-49.0' N
1 /2	36 -57.0	37 -20.0	37 -47.0
(経度)	37 -02.0	37 -24.0	37 -52.0
st-1	141-00.6 E	141 - 04.7 E	141 -00.7 E
1 7	140 -59.0	141 -03.0	141 -00.0
	141 -01.0	141 -05.0	141 -02.0
st-2	141 -06.5	141 -09.0	141 -05.7
5 #	141 -04.0	,141 -08.0	141 ~04.0
L	141 -07.0	141 -11.0	141 -07.0
st-3	141 -11.5	141 -15.0	141 -11.8
10 72	141-10.0	141 -13.0	,141 ~10.0
10 1	141 -13.0	141 -17.0	141 -14.0
S1-4	141 -24.0	141 -27.3	141 ~24.2
20 個	141 -22.0	141 -25.0	141 -22.0
- TO 15	141 -26.0	141 -30.0	141 -26.0
st-5	141 - 36.5	141 -40.0	141 -36.8
30 産	141 -34.0	141 -38.0	141 -35.0
	141 -39.0	141~42.0	141 -39.0
st-8	141 -49.0	141 -52.0	141 -49.0
40 億	141 - 47.0	141 ~49.0	141 -47.0
	141 -50.0	141 -53.0	141 -51.0
51-7	141 -01.5	142 -05.0	142 -01.7
50 厘	141-59.0	141 -59.0	141 -58.0
	142 -03.0	142 -06.0	142 -04.0
st-8	142 -14.0	142 -17.0	142 -14.0
60 億	142 -12.0	142 -15.0	142 -12.0
	142 -16.0	142 -19.0	142 -16.0
st-9	142 -27.0	142 -30.0	142 -27.0
70 程	142 - 26.0	142 -28.0	142 -26.0
	142 -30.0	142 - 32.0	142 -30.0
st~10	142 -39.0	142 -42.0	142 -39.0
80 7⊈	142 -37.0	142 -40.0	142 -37.0
	142 -41.0	142 -44.0	142 -41.0
st - 11	142 -51.0	142 -55.0	142 -51.0
90 8	142 -49.0	142 -53.0	142 -49.0
	142 -53.0	142 -55.0	142 -53.0

の月平均値 $(12 au extbf{月})$ を用い,定点相互の相関係数r $= \sum (x_1 x_2) / \sum (x_1^2) \sum (x_2^2)$ から定点相互の関係をみる。

積算平均値について。それぞれの定線のst-1を除く定点において、表層から最下層までの積算平均水温値を連続的なグラフにすることにより、定線および定点における親潮勢力の強弱や長期的な振動についてみる。

海況の持続性と予測について。塩屋埼の1浬-0m, 10浬-50m·100m層の3点において1965年からの水温変化と先に計算した月平均値との偏差を記号で示し、海況の持続性について論じ、さらに海況の短期予測を試みる。

図1.



結果および考察

1)

月平均値についての考察は、すでに報告しているので、ここでは標準偏差について述べる。先ず、表 2(A)が示すように塩屋埼の全般的な傾向では、標準偏差値 の小さな月の出現は 9 月が圧倒的に多く、1 0月、1 2月の順になっている。一方、大きな値の出現は、4 月、3 月、5 月の順になっている。すなわち、水温変化が少なく安定しているのは、9 月、1 0月、1 2月であり、反対に水温変化が大きく不安定な月は 4 月を中心にした 3 ~ 5 月の春季である。表 2 (B)で示すように富岡定線では、変化の少ない安定している月に 1 2 月が出現しているが、これについては冬期の観測が少ないことから標本数が少ないために値が小さくなっているのであろう。また、水温変化の大きい月の出現では、3 月が一番多く、塩屋埼と若干の違いがみられる。鵜ノ尾埼で安定しているのは 2 月が多く、次に 9 月である。前者は最低水温期であり、後者は最高水温期と同時期である。水温変動の大きい時期は他の定線同様 3 月、4 月、5 月であった(表 -2 (C))。定線別の出現月については以上のとおりであるが、の最小、最大の年間平均値では、塩屋埼定線の値が一番大きく富岡、鵜ノ尾埼と北へ移行するにつれて小さくなっている。すなわち、本県では南部海域ほど海流系による水温の変化が激しい。

							_		_		
	M	定線	塩	屋埼	定	椒		(A	()	
	7	7/		榖		小		殿		t	
_ [Re S	<u> </u>		1		2	Γ	1		2	
順位 位 の	'aa ∖	À.	Я	0-	Я	0	月	~	月	~	
位角	0 F4	st - 1	9	1.160	8	1.241	2	3.723	1	3.201	1
及		- 2	9	0.985	10	1.431	4	2.586	3	2.475	
ř۰		- 8	9	1.187	10	1.512	+	3.129	3	2.672	
		-4	9	1.114	2	1.486	*	4.586	3	3.334	ı
		- 5	12	1.063	9	1.145	4	3,888	8	8,798	ı
	10 m	st - 2	9	0.985	1	1.411	4	2,630	8	2.832	Į
		- 3	9	1.232	2	1.548	4	3.189	ı	3.068	
		4	9	1.342	12	1.647	4	4.008	3	3.059	ı
		- 5	12	1.09B	9	1.261	4	3.916	3	3.278	L
	20 M	st - 2	10	1.089	9	1.127	5	3.213	6	2.588	ľ
		- a	2	1.874	10	1.478	4	3.888	5	2.985	1
		-4	9	1.381	12	1.781	4	4.301	8	3.379	ı
		- 5	12	0.506	1	1.408	4	4.341	3	3.609	
	50 m	st - 2	10	1.035	9	1.270	5	2.803	в	2.706	l
		- 3	2	1.045	10	1.510	4	3.143	5	2.936	ı
		-4	10	1.499	12	1.640	4	4.177	5	3.409	ı
		- 5	12	0.953	1,	1.114	3	3. 721		3.686	ļ
	100 m	st - 3	2	1.013	8	1.202	6	3.429	9	2.690	
		- 4	1	1.415	2	1.526	4	3.466	5	3.358	ı
1	1	-5	12	0.459	1	1.068	4	3.826	3	3.506	
	200 m	st - 5	1	1.415	7	1.807	8	3.382	6	2.921	
	平	白値	1	1.144	t-		Г	3.572	Г		1

										表	2
	M	定線	髙	岡神	定	報		(В)	
	172	14		最	′	l,	Г	殿		大	
転出	F9 \ 5	E T/	Γ	1		2		1	[2	
一現	™ \	点	Я	0	A	o	Я	0	Ħ	~	
現月及び の の の の の の の の の の の の の の の の の の の	0 m	st - 1	9	0.843	2	0.942	4	2.662	5	2.365	l
Û		2	9.	1.069	1	1.251	3	2.669	5	2.517	ı
٠		3	1	0,948	9	0.960	3	3.949	5	2.701	į
	l	4	2	0.704	12	9.852	•	3.200	3	3.177	6
		5	12	0.056	9	0.915	8	4.321	5	2.575	ľ
	10 m	st - 2	11	0.951	9	1.104	3	2.500	5	2.314	
		3	12	0.998	2	1.270	3	8.280	7	2.566	
		4	12	1.012	8	1.175	3	3,565	4	3.465	1
	L	5	12	0.140	l	0.645	3	4.119	5	3,860	
	20 m	st - 2	9	0.770	11	1.130	3	2.427	8	2.359	1
		3	11	0.873	2	0.959	3	3.472	+	2.676	ĺ
		.4	2	0.732	12	0.816	3	3.788	4	3.464	
				0.000	10	0.470	8	4.40l	9	4.314	
	50 m	st - 3	1	0.806	2	0.932	3	2.960	4	2.625	ı
		- 4	2	0.341	12	0.804	3	8.572	8	3.483	
			12	0.165	1	0.725	3	4.110	5	3.484	
	100 m	st - 4	2	0.340	- 1	0,553	3	2.901	10	2.792	
			_	0.705	1	0.775	10	3.861	9	3.713	
	200 M	st - 5	12	0.000	1	0.560	6	8.603	8	2.929	l
	<u> </u>	L					L		L		
	平 *	9 値	Ш	0.611	L			3.434	L		Į

≥.	1	月平均	匀水	温	標	準偏	差值	お	ょ
	U	出現)	月 (s 1	5,	1~9	50	. :	3)

		定模	档	/ 尾	埼	定線	(C)								
_	$\overline{+}z$	12		段		小		最		大					
В	R \2	£//	L	1		2		1		2					
1	L \	Á,	月	~	月	a	月	~	Я	0~					
į	0111	st - 1	2	0.402	1	0.893	5	2,812	7	2, 231					
٠,		2	2	0.232	11	0.656	5	2.767	7	1.722					
•		3	2	0.855	11	1.062	5	2.266	3	2.028					
		4	2	0.564	8	0.992	3	3,556	4	2.389					
		5	1	0.300	2	0.887	3	4.220	4	3.803					
	10 m	st - 2	2	0.666	3	1.165	5	2.737	7	2.286					
		3	2	1.167	9	1.274	5	2.555	6	2.178					
		+	2	0.979	9	1.037	8	8.157	4	2.408					
		5	2	0.447	ø	0.818	8	3,545	7	8.385					
	20 M	st - 2	2	0.434	9	0.597	6	3.434	7	2.817					
		3	9	0.194	3	0.964	6	2.560	8	2.484					
		+	2	0.632	1	1.011	3	3.286	4	2.866					
1		5	1	0.035	2	0.712	4	3.905	3	3.861					
	50 m	31-4	2	0.543	1	0.986	3	8.395	В	2.719					
	İ	5	1	0.325	2	0. 887	4	4.094	3	2.983					
į	100 m	st - 5	1	0.035	5	1.215	4	3.938	10	3,596					
	平义	值		0.441	П			3.420							

塩分量では、表 3に示すように沖合より沿岸が低塩分であり特に1浬点ではその傾向が顕著である。また、1 浬海域でも塩屋埼よりは富岡が低く、鵜ノ尾埼は更に低くなっている。このように鵜ノ尾埼における塩分量が他の 2 定線に比べて極端に低いのは、前にも触れたように仙台湾の中に位置しているために陸水の混入が多いのであろう。季節別では、9月に極小値の出現が圧倒的に多く、次に7月である。9月は台風シーズンで、7月は梅雨でありともに降水量が多いための影響と考えられるが、50m層や100m層においても9月に極小値の出現がみられることを考慮すれば、他の原因も作用しているのであろう。年間の変化では、11月頃から3月、4月まで比較的高塩分で経過し、初夏5月から10月頃にかけて低塩分である。層別の特徴では、100m層が高塩分で表層に近い程塩分量が低くなっている点が注目される。100m層では、周年塩分変化が少なく高い値が持続しているためであろう。標準偏差値では、2月には小さな値を示している反面9月、10月は大きな値となっており水温でみられた特徴とは若干矛盾している。この点については今後充分に検討する必要があろう。

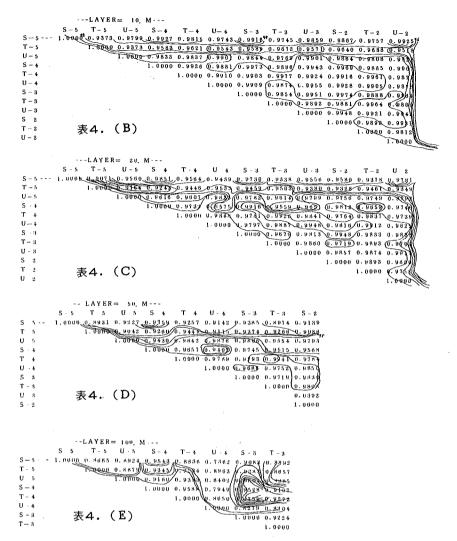
表3. 塩 分 量 月 平 均 値 お よ び 標 準 偏 差 (s15.1~s50.3)

1	1 18	1.4	: 1	, ,	• "	5 A		7 4	* 4		10 A	11 4	12 3	1 11
(78)	S (L#)	44.414	14 410	84.175 0 54	33.529	33.516 0.45	13.651 0.97	32.312	83.541	12.704	35.031	34.119	14.005	23.845
	T 1(*)	43.652	36.013	33.713	\$3.1d9 0.25	33.291	33.176	1 03	32.472	31.812	32.05× 2.19	23.761 0.51	33 760	43. 150
	0 10 - 1	33.972 0.55	35.73K	33.170 0.42	31.937 1.55	32.874	2.02	19. 899	1 17	34 746	31.047	33. HAT	33.154	34.111
	S 5 (30 (2)	34.300	34.284 0.35	9 72	34.295	36.060 0.11	33.914	33-111 0.32	#4.76E 0.35	33.35g 1.06	33.510	33 934 5.34	33.130	33.94#
	T 5(+)	34 250	33.754 0.12	0.17	93 131	93 854 0.61	33.845	33.4A3 0.60	0.14	31 H76	33.172 1.35	33.905 0.21	13.755 0.73	38.713
	(i-s(+)	33.780	33 812 0.15	33. 0 A 2 1. 10	38.62 P	93 - 394	33.657	33.452	33.550 U.11	33.616 9.21	35.813 0.17	33 7US 0.34	1.31	33.118
304	S-3: (0/1.)	9 40	34.306	36 129 D. 37	34.212 0.25	93.946 Q.35	43.918 0.33	33.90E	54.000 0.40	33.640	33.4×1	33.870 0.37	84 027 0.44	24.011
	7-1(-)	36.005	34.120	4.44	3 4. 00 £ 0. 55	83.130 0.59	0.31	33.979	0.33	1.03	33.554	34.057	38.850 0.36	33.532
	U-3(*)	34.247	34.092 0.28	1.13	33.699	33.894 0.37	93.124	33.745	0.83	33.454	2.10	33.198 0.44	34.001 0.35	33.819
100*	S 5 (30 / F)	9- 61	34.110	34.117	34.250 0.35	34.249 0.42	34 124 0.36	33 984 0.25	34.124	33.501	33.556 1.3#	33.986 9,30	55.500 0.25	36.042
	T 5(* 1	34 110	33.725	9.32	33.523	33.865 0.05	33.78¥ 0.35	33. A57 0. 30	94.007 0.18	33.866	34.040 0.24	33.562 0 17	98.150 9.31	33.802
	U-31 + 1	33. 770	4 1"	33.7±7 0.1×	33.459 0.30	81.K31 0 26	31.7 H\$ 0.37	33.548 0.38	9.21	53. * 45 0. 45	33.943	33.H79 0.39	0.49	33 842
2 0 DM	S 5 (30/E)	14. 28K	34.045 0 31	33 559 0.17	13.773	34.950 0.22	37.510	8. 38. 451	0.30	33,551	33.312	34.068 0.36	31.847 0.31	33. 365
	T-5(+)	34.035	54.695	23 903	13.465 0.37	0.10	23.668 0 31	#3 NOU 0.11	13 640	35.126	32.910	0.16	34.150	33.164

定点間の相関については、始めの年間の月平均値を使用して、相関係数 $r = \sum x_1x_2 / \sum (x_1^2)$ $\sum (x_2^2)$ を計算した結果、水温での相関係数値は表4(A)~(E)に示すとおりほとんどの部分で 0.9 以上で、かなり高い値となっている。このような高い値の中での差を比較することについては異論もあろうが、若干の特徴について述べる。

層別の値の比較では,0 m層が相対的に高く,深くなるにしたがって小さな値となっている。また,定点間の相関では,隣の定点,すなわち距離の近い定点との間に高い相関がみられることは当然であろう。0 m層の特徴をみるとS-2が他の定点に対して高い相関を示していることは,S-2がある意味において0 m層における代表点とみなすことが可能であろう。また,各層で共通しているのは,T-5 が他の定点に対して相関が低く孤立した存在となっている。

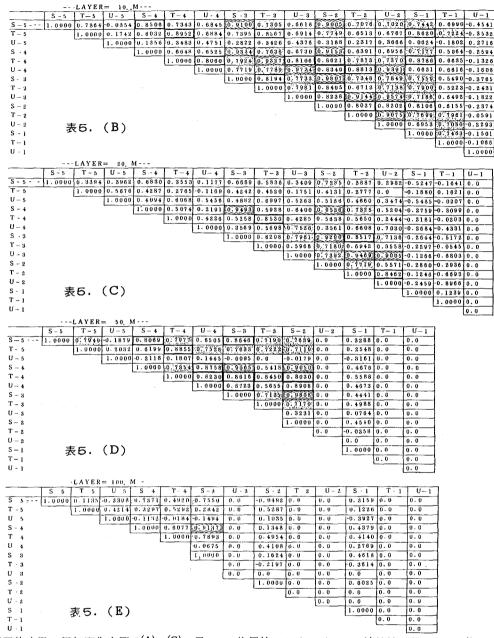
<!!> CORRELATION COEFFICIENT ABOUT EACH STATION --- WATER TEMPERATURE '----- LAYER = 0, M---S-4 T-4 U-4 S-3 T-3 $U \sim 3$ T - 2 U-2S - 1 -- 1. dodo 0. 4534 0. 4775 0. 4827 0. 4793 0. 4748 0. 4890 0. 4705 (0. 4816 0. 4849 0. 4713 0. 4841 0. 4276 (0. 4853) (0. 4863) 1. 6000 0.9600 0.9769 0.9779 0.9742 0.9756 0.9758 0.9757 0.9868 (0.9737 0.9865 0.9555 0.9681 0.9550 1.9600 0.9769 0.9769 0.9761 0.9967 0.9769 0.9764 0.9515 0.9868 0.9598 1.9000 0.9764 0.9515 0.9868 0.9598 0.9598 0.9600 0.9891 0.9861 0.9861 0.9868 0.9598 0.9881 0.9861 0.9861 0.9881 0.9881 0.9881 0.9881 0.9881 0.9881 0.9881 0.9881 0.9881 0.9881 0.9881 0.9881 0.9881 0.9888 0.9881 T - 5 U - 5 1.0000 0.9899 0.9899 0.9980 0.9924 0.9918 0.9838 0.9838 0.9576 0.9923 0.9765 1.0000 0.9907 0.9903 0.9985 0.9938 0.9942 0.9878 0.9567 0.9921 0.9734 1.0000 0.9801 0.9923 0.9978 (589% 0.9885 0.9605 0.9901 0.9788 1.0000 0.9899 0.9923 0.9975 0.9772 0.9654 0.9890 0.9870 1.0000 0.9957 0.9933 0.9922 0.9531 0.9958 0.9816 1.0000 0.4048 0.9870 0.9662 0.9946 0.9784 S - 3 S - 2 1.0008 0.9764 0.9842 0.9941 0.9816 1.0000 0.9293 0.9863 0.9961 U - 2 1.0000 0.9498 0.9151 S - 1 表4.(A) 1.0000 0.9172 T - 1 1.0000



塩分量での相関では、水温の相関程には高い値を示さず、0.9以上の値は隣の定点にみられる程度である(表5(A)~(E))。共通した特徴は、u-5の相関が他からみて極端に低い値となっているのは、この海域において海流が変化する場合が多いためと考えられる。

-: 11 > CORRELATION COEFFICIENT ABUT EACE STATION --- SALT'---

		LAYER:	= 0. ?	M											
	S - 5	T - 5	U - 5	S - 4	T- 4	U - 4	S – 3	T-3	U- 3	S - 2	T-2	U 2	5 – 1	T - 1	U - 1
S - 5	1.0000	0.8019								0.7280					
T 5		1.0000	0.2746	0.7300	0.8342	0.7137	0.8908	0.7968	0.6494	0.6879	0.7723	0.6575	0.8513	0.8452	0.7844
U — 5			1.0000	0.4310	0.5218	0.4040	0.5487	0.5004	0.4160	0.5809	0.4689	0.6411	0.5861	0.4747	0.5597
5 - 4				1.0000	0.8132	0.5809	0.9455	0.8253	0.7253	0.9055	0.7712	0.7420	0.8091	0.8044	0.8544
T - 4					1.0000	0.6650	0.8318	0.9186	0.7160	0.8079	0.8423	0.7482	0.9325	0.8696	0.8457
U 4						1.0000	0.7044	0.7624	0.9259	0:7645	0.8488	0.7654	0.8413	0.7982	0:7517
S · 3							1.0000	0.8613	0.8277	0.9767	0.8008	0.8262	0.8775	0.7987	0.8890
T-3								1.0000	0.8209	0.8503	0.8838	0.7921	0.9178	0.8658	0.8267
U - 3									1.0000	0.8781	0.9077	0.8236	0.8504	0.8365	0.8382
S - 2										1.0000	0.8075	0.8222	0.8774	0.8262	0.8839
T - 2											1.0000	0.8439	0.92593	0.9481	0.8867
U - 2	夫	5.	(A)									1.0000	0.8832	0.7679	0.9561
S - 1	21		(2-)									·	1.0000	0. 9333	0. 9293
T - 1														1.0000	0.8524
U - 1															1.0000

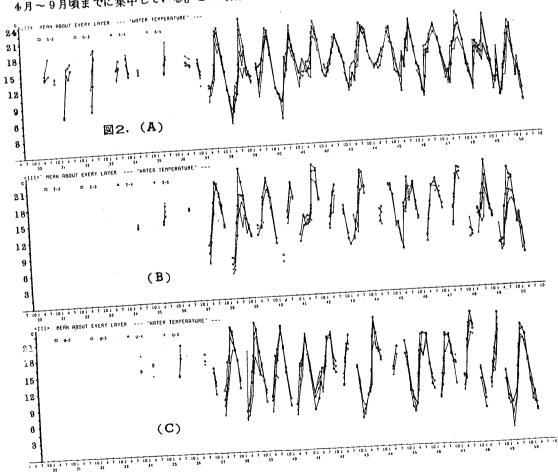


積算平均水温の経年変化を図 2(A)~(C)に示した。塩屋埼におけるグラフの連続性が強いのは、他の定線より観測が多いためである。塩屋埼での観測が密であったといっても 1962年以前は、年間 5~6回であったため、グラフは不連続となっている。前にも述べたように観測に 2ヶ月以上の空白がある場合は、グラフは連続しないことになっているので、富岡、鵜ノ尾埼の冬期は不連続が多い。

毎年の季節変化では、ほぼ9月を最大値とし2~3月を最小値としている。9月の最大値をそのまま黒潮系水の勢力とするには、問題があるが、3月の最小値は親潮系水の勢力と考えられる。このようにして塩屋埼定線をみると、最大値の年変化は少ないが、最小値は年により変動が生じていることがわかる。すなわち、3月にみられる親潮系水には明らかに年変動が認められる。

長期の周期については、このデータだけで判定するのは危険であるが1965年、1963~1965年 1974~1975年をそれぞれ、低温期(親潮の増勢期)とするリズム(周期に近い変動)が認められる。かって畑中は親潮勢力について9年の周期を報告も)したが、ここでは10年前後の漠然とした振る。かって畑中は親潮勢力について9年の周期を報告も)したが、ここでは10年前後の漠然とした振動である。富岡定点でも塩屋埼定線と同様な傾向を示しているが鵜ノ尾埼では30浬点であるst-5動である。富岡定点でも塩屋埼定線と同様な傾向を示しているが鵜ノ尾埼では30浬点であるst-5動である。塩屋埼では30円が出ているのまた、鵜ノ尾埼の技海域では湾性のため大気の冷却、輻接の影響をうけにくいことを示唆している。また、鵜ノ尾埼の技海域では湾性のため大気の冷却、輻射をうけやすいことから年間の振動の巾が大きいことも注目すべきである。塩屋埼では3月の低温期射をうけやすいことから年間の振動の巾が大きいことも注目すべきである。塩屋埼では3月の低温期の後の5月頃に独立した小さな山が認められる年が多く、他の定線で認められないことからこれらのの後の5月頃に独立した小さな山が認められる年が多く、他の定線で認められないことからこれらの独立した山は常磐鹿島海域から張り出す暖水舌によるものであるう。

塩屋埼における海況の持続性については、はじめの月平均値を用い1型の0m層、10型の50m層、100m層の3点について述べる。図3(A)~(C)の示すとおり3点ともに記号の出現傾向は非常に似ているが、0,50,100m層と深くなるにつれて平均に近い記号(□○区)が少なくなっている反面、高温もしくは低温(○×)に別れる傾向が強い。同記号の連続すなわち海況の持続性に関しては3点高温もしくは低温(○×)に別れる傾向が強い。同記号の連続すなわち海況の持続性に関しては3点をもに強く、少なくとも5~6ヶ月は続いている。特に注目すべき点は10月、11月の海況が翌年のともに強く、少なくとも5~6ヶ月は続いている。年に注目すべき点は10月、11月の海況が翌年のともに強く、少なく傾向が非常に強いことである。この傾向は50m、100m層でも同様である。し春の3月頃まで続く傾向が非常に強いことである場合は翌年の3月頃まで高温が持続し反対に低温であれば低温が持続している。反面、持続が切れる時期、すなわち変動の生ずる時期については、低温であれば低温が持続している。この時期はある意味で不安定な時期であろう。以上のことをふま4月~9月頃までに集中している。この時期はある意味で不安定な時期であろう。以上のことをふま



,	_				
SHIO	YΑ	.2	A	K	1
					-

1	. MI L		R 0.	M			(]	眞)					10.N			50.N	1		()	B)					10.1	LAY	ER :				((2)				
	JAN	FEB	MAR	APR	MAY	J UN	JUL	AUG	SEP	OCT	NOV	DEC	JAN	FEB	MAR	APR	MAY	JUN	JUL	AUG	SEP	OCT	NOV	DEC	JAN	FEB	MAR	APR	MAY	JUN	JUL	AUG	SEP	OCT	NOV	DEC
1965	×	×	×	×	×	×	Х			×	х	×	L.			×	×	×	×	⊠)	Ø		×	×				×	×	×	×	х	×	0	0	×
1966		0	0	a			×	×	Ø	0	0		M	0	0		×	×		図		0	0	0	⊠				×	×	×	×	×	Ø	0	0
1987				0	Ø	Q	0	Ō	23	Υ_	×	×			0	0	0	0	0	×	×	×	×	×	0	0	0	0		0	0	0	×	×	×	X
1968	×	×		0	0	0	0	0	0	.DJ	Ø	0	×	×	\boxtimes	×	×	×	0	O	0	0	0	0	×	×	×	×	×	×	×	×	0	0	0	0
1969	0	0	0	0	0	0	⊗			0	0	0	0	0	0	0	0	×	×	Ø	0	0	0	0	0	0		×	×	×		0	0	0	0	0
1970	Ō	Ç	Ø	×	0	Ø	Ø	⊗				⋈	0	0	×	×			×	⊠		⊠.	×	×	0	0	0	0		×	⊗	Ø	Ø		0	0
1971	×	×	×	×	Ø	Ø	0		×	×	Ø	a	×	×	×	0	0	0	O	0		×		0	×	×	×		0	0	0	0	×	×	0	0
1972	O	×	×	0	0	0		0	×	0	0		0			×	×	0	0	0	(C)	⊠)		×	0				×	0	0	0	0	0	0	\Box
1973	×	×	×	0	0	Ø		Ø		×	×	×	×	×	×	0	0	×	×	×		0	×	×	0	0		0	0	0		×	×	×	×	×
1974	×	×	×	×	×	×	×	×	×	Ø	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	Ø	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	0	×	×
1975	×	×	×	×	×	×	×	×	Ø	Ø	×	ж	×	×	×	×	×	×	×	⊠	×	_×	×	×	×	×	×	×	х	×	×	×	х	×	×	×
1976		Ø											×												×											

O UPPER OF MEAN

UPPER AND NEAR MEAN

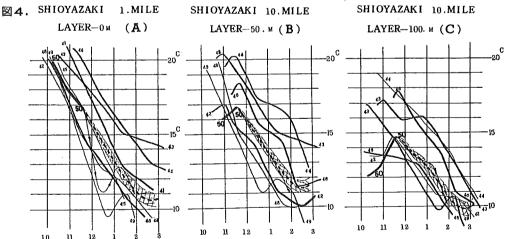
× LOWER OF MEAN

□ LOWER AND NEAR MEAN

☐ MEAN

えれば 1973年, 1974年の 異常冷水 は突然に出現したかのように思われたが塩屋埼におけるこれ らの特性をみると決して突然に出現したのではなく前年の秋強いては夏頃から前兆があったと考えら れる。

これらの特性を考慮すれば、特定の時期における短期予測が可能と考えられるので以下水温の予測を試みる。図4(A)~(C) は過去数年間の秋から春にかけての水温経過ならびに予測水温である。予測は1975年11月までの観測値から、それ以降3月までの水温を予測したものである。予測の根拠は先に述べた持続性、11月頃の水温の平年偏差、積算平均水温値の連続グラフにおけるリズム等である。塩屋埼1浬の0m層を例にとれば、1975年の9~10月には低温に経過していたが10月末から11月中頃にかけて徐々に昇温して平年水温に近くなっている。50m層においても同様な傾向を示している。したがってその後の水温は平年値か平年をやや下回る水温で経過する可能性が強い。図中矢印の線は、実測値、すなわち予測に対する検証である。塩屋埼1浬0m層の12月を除けば、ほぼ予測に合った水温で経過したことが証明される。塩屋埼における水温特性から春季親潮を予測するには、若干の問題があろうが予測の一つの方法として偶然より期待される一致率よりは、はるかに高い的中率が12月から3月にかけて得られるであろう。



しかし、本県海域で一番必要とされる海沢予測の時期は、何といっても春から夏にかけての暖水に ともなう温水系回遊魚の北上する時期であろうがこの時期について先にも述べたように海況に持続性 がみられず変動が激しいため現時点での予測はむずかしいが、今後は何らかの方法でこの問題に取り 組む必要があろう。

- 1. 本県海域で水温変動の大きい時期は4月を中心にした3~5月であり反面変動が小さく安定して いるのは、9月、10月である。
- 2. 塩屋埼定線は,他の二定線よりも海流系による水温変動が激しい。
- 3. 塩分量では沖合よりも沿岸が低い。また、鵜ノ尾埼の桟海域は陸水の混入が多いため他よりも極 端に低い。
- 4. 年間平均塩分量では、100 m層が高く表層ほど低い。
- 5. 定点間の相関では、距離の近い隣の定点に対して高い相関を示している。また、塩分量の相関で は,u-5 (鵜ノ尾埼 30 狸)の相関が低いことが注目される。
- 6. 積算平均水温のグラフで3月に出現する最小値は、親潮系水の勢力を示し、その勢力には、10 年前後の波が認められる。しかし、鵜ノ尾埼定線では不明確である。
- 7. 塩屋埼定線の3点における水温経過をみると、水温に持続性が認められ、特に秋から春にかけて は,持続の傾向が強い。すなわち,春に親潮が強く著しく低温の年は前年の秋もしくは,夏頃から その兆しがある。
- 8. 1975年 11月の塩屋埼での観測値をもって,翌年の3月までの水温の予測を行ったところ,ほ ぼ満足した結果が得られた。

なお,計算に際しては東京電力(胍)の全面的な協力を得た。ここに謝意を表します。

文

1) 石井 勇:福島県の沿岸海沢 – I,福島水試研報,第3号, 11~16(1975)